

令和元年8月1日発行 春燈/第74巻第8号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2019 August

8月号



主宰の句

安立公彦

満目の植田の果ての古城かな

草笛を小諸に聞きし日や遙か

老鶯の一途のこゑや晶子の忌

指呼の間の渡舟に躍る五月川

昼寝覚きのふに変はる何もなし



久保田万太郎の句

秋裕育ちがものをいひひにけり

『久保川万太郎句集』（昭和十七年）

万太郎師は「人目に肌をさらすことを極端に嫌ったそうである。それは持ち前の潔癖さと、都会人特有の羞恥感であろう」中村哮夫『久保田万太郎』（慶天出版会）育ちとは洗練された教養であろう。やたら家柄を吹聴するのは無粋と思われる。男性の和服姿は作法通り着れば、育ちの良さが滲み、格調高く見える。「氏より育ちを」を詠いあげた生粋の都会人の真骨調の一句と思いたい。

小島 昭夫

久保田万太郎の句

親一人あとにのこりし螢かな

「春燈」昭和二十二年

最愛の一人息子、耕一が三十五歳の若さでこの世を去った。「親一人あとにのこりし」の言葉から、万太郎の深い悲しみと絶望感が伝わってくる。

昭和十九年に耕一が召集を受け出征する際に〈親一人子一人螢光りけり〉の句を詠んでいるが、それと呼応するかのような句である。ひとりぼっちになってしまった万太郎。蛍の淡い点滅が一層寂しさを募らせる。

荒井ハル工

燈下集



○ 小張志げ

夏めくやシート三枚風まかせ
葉表と葉裏の会話かたつむり
すずらんや育児日記の苦も楽も
青林檎真二つにして子への愛
ジャスミンへ鼻寄せてゐる漢かな

○ 江草 礼

シテを呼ぶ笛の音高し薪能
校庭の隅に子の寄る蝸牛
縞蛇の徘徊あとの草立てり
ターバンの笛にのびたり蛇の舌
明易し夢は不消化のまま了る

○ 岩永はるみ

幼子のはじめの一步聖五月
母の日や白き卓布に糊きかせ
角出して何に向かふや蝸牛
夜の橋を吹かれて渡る浴衣かな
口答へせぬがよろしよ竹夫人

○ 木多芙美子

母の日やぬくみの残る木のベンチ
郷愁の古書肆の匂ひ走り梅雨
渡し舟見送る日傘廻しけり
逢はぬ間の思ひの丈や夏蓬
あの夏の記憶や父の戦闘帽

○ 林 紀 夫

野面積の砦の跡や若葉風

満席のオーブンカフェ新樹光

武蔵野の空の青さよ田水張る

新緑の御岳溪谷空深し

拝殿の長き石段蛇の衣

○ 中野 さき江

一芸に生きしまことや写真の日

消えのこる虹うすきほど胸に濃き

働きし十指を翳す五月富士

ブラウスの衿より初夏の香りかな

ぼうたんの崩れ浄むる夕日かな

○ 栗 原 完 爾

震度五にひるむ真昼のソーダ水

どくだみの臭親しや修司の忌

庭蜥蜴見て訳もなく安堵せり

豆飯を炊いて子を呼ぶほどでなし

梅雨近し夕べは尖る取水塔

○ 小 菅 礼 子

癒さるる彩とりどりの牡丹畑

五月連休どこへも行けぬひとりかな

孫嫁の気遣ひ嬉し母の日や

夕散歩淋しさ忘るさつき咲く

庭の花つぎつぎ卯の花腐しかな

○ 本 多 遊 方

衣更へてその日法事の席にをり

衣更へてみても僧形変りなし

父方のふる里の鮎釣られけり

LEDライト付水槽セット金魚飼ふ

汗手貫の正体問はる僧衣かな

○ 武 田 巨 子

オリーブの木々渡りゆく風眩し

水匂ふ八十八夜の峽の宿

あをあをと川面の匂ふ薄曇かな

夏蝶の野菊の墓へ誘へり

薫風に飛天の朶を聴きにけり

○ 諸岡孝子

硯海の水たつぷりと夏隣

十葉や茶筥供養の女文字

傘雨忌や小筆にのこる墨のいろ

一番星とらへてをりぬ夏燕

君悼む野藤の空のさだめなく(悼)

○ 小泉三枝

蜷の道ナスカ地上絵描く勢

葱坊主列を乱す子背伸びの子

きしむ櫓と舟打つ波に春惜しむ

ダリア植う黄泉の入口かも知れず

母逝きて初の母の日来りけり

○ 平野加代子

御代四代の母の文箱や余花の雨

ティアラ燦と令和の夏の生まれり

更衣まづは眼内レンズ替へ

新緑を弾きとばして登校す

浅草初夏まぎるる我も異邦人

○ 田嶋洋子

小学校の名入りの法被神輿の子

草笛の兄弟めける父子かな

はたらきものに育ちし娘桐の花

吉祥や木立の朝の蛇の衣

船頭の艫の音涼しく流れけり

○ 菅澤陽子

清和なる令和初日の写経かな

母の日や金の生る木の花ざかり

鎖場のスリルや山頂風薫る

山腹に昼餉や老鷲ひとしきり

姫皮の梅肉和へや夏めきぬ

○ 長谷川歌子

若き医師の真つ直ぐな目や聖五月

禍事の雲吹き払へ大夏風

貸農園の結界侵す瓜の花

気に入りの未だ似合ひけり更衣

玉垣に江戸の町名額の花

余言

安立公彦

おほらかや江戸川夏を横たはり

三上 程子

「江戸川」は周知の通り利根川の分流。千葉県野田市の関宿から東京湾に注ぐ全長六〇軒の大川。私たち千葉県に住む者にとって、東京方面から電車で揺られての帰途、この江戸川を渡ると、何となく安堵の思いがする。

この句、「江戸川夏を横たはり」が、まさに江戸川の風姿を言い得ている。さらに上五の「おほらかや」がその思いを引き立てる。先日催された千葉文部大会での作品である。下総の風物には、見るべき地理がまだ残っている。

鶴鳴くや自分らしさが身をしばる

鷹崎由未子

「鶴^{たづな}」は虎鶴。歳時記には、前者を主季語としたものと、その逆の用法がある。電子辞書で鳴き声を聞くと、「ひいひい」と、文字通り寂し気な、一面無気味な声で鳴く。古来伝説の怪鳥として脚色されている。

この、「自分らしさが身をしばる」は、作者らしい真摯

な表現である。歳時記の例句を見ても、このような句は無い。人生を真摯に考えている思いが、真逆の季語を善く一句に取り入れている。俳句の表現の広さを考えさせる句と言えよう。ただ、「身をしばる」は厳し過ぎる。

ハモニカ我真鍮の味夏は来ぬ

卯木 堯子

「ハモニカ」、懐かしい楽器だ。戦後の中学生は良くハモニカを吹いていた。他に楽器として無かった頃のことである。この句「真鍮の味」が絶妙だ。吹き継がれてきたハモニカを口にする時、この「真鍮の味」がずっと来る。

作者の「真鍮の味」も恐らくこのような思いの為せるものだろう。この句は然し懐旧の句ではない。「夏は来ぬ」に、ハモニカを今も愛でる思いがよく活かされている。

母の日やぬくみの残る木のベンチ

木多芙美子

「母の日」も「父の日」も共にアメリカを租とするが、母の日ほど父の日は普及していない。今さらのように母の偉大さを思う。顧みるにわが皇室の祖神は天照大神。天の岩屋戸の神話にも、女性の偉大さは出ている。

この「ぬくみの残る」は、今まで母が坐していた「木のベンチ」を示す。その母の温みは、時代を経ても今も尚木のベンチに残っている。「触感」が「感覚」に昇華した

句である。「ぬくみの残る木のベンチ」は言い得ている。

ティアラ燦と令和の夏の生まれり 平野加代子

「ティアラ」は女性がつける王冠形の髪飾り。この句のティアラは歴代皇后に受け継がれたもの。去る五月一日、一億の民は挙ってテレビの前に坐した。新天皇の即位である。新皇后のティアラが殊に燦と輝く。

作者はテレビに写る新天皇、新皇后の姿に見入る。「ティアラ燦と」はその時咄嗟に口を衝いて出た言葉であろう。「令和の夏の生まれり」には、心新たな思いが籠もっている。令和よ善き世であれ。

薔薇一りん患ふ妻に買ひにけり 吉川 隆

「母の日」の贈物だ。赤いカーネーションでなく、「薔薇一りん」が善い。赤い薔薇の花だろう。「患ふ妻」とあるが、入院中か或いは自宅で静養中なのだろうか。命数を一般論で記すのは適切ではないが、世に夫婦の長命度は妻が勝る。私の両親もそうだった。妻の母は百一歳まで生きた。薔薇一りんを妻に買う作者の思いは、必ずや天に届くだろう。「患ふ妻」の快癒を願うばかりである。

初夏の櫓音や若き渡し守 藤原 若菜

五月三十日の千葉支部大会は盛会だった。当日私は、北総線矢切駅で、藤原若菜、平沢恵子お二人と待合せ、西蓮寺、矢切の渡し、柴又と案内して貰った。西蓮寺から江戸川の辺りは、東京に隣接している地域とは思えない牧歌的な風景が残っている。麦畑もあった。矢切の渡しは私たち三人のみで、若い船頭は川上へ大きく迂回して、江戸川を堪能させてくれた。無愛想だったが誠実な川守だった。

この句、「若き渡し守」が善く効いている。「初夏」も当日の印象と、この渡し守にふさわしい。こころ洗われる思いで初夏の江戸川の波音に聞き入っていた。

若葉風をさな指より夢に入る 小山 繁子

この句を見ながら、しばしその投句用紙から眼が離せなかつた。「をさな指より夢に入る」。この「をさな」は三歳児か。何よりも、「指より夢に入る」の発音が素晴らしい。泣きながら指を立てていた幼児。その指がふと止まる。見ると幼児は眼を噤じている。若い母親はその指を戻しながら幼児の涙を拭く。母親の愛情と、その愛情を一杯に受けた幼児の、健康そうな姿が浮かんでくる。

作者は長年保育園の園長を勤めて来た。景を適切に表現するのは難しい。この句はそれを善く為している。

当月集

安立 公彦選



○ 宮崎 紗伎

ありなしの風におもねる藤の花

惜春の鉄橋赤き電車のせ

晩春や青貝散らす文書箱

夏兆す好みのシャツの肌ざはり

路地は午後うつらうつらと額の花

○ 佐藤まさ子

夏立つや旅行鞆を買ひ替へて

郭公のしきりに鳴くや遊歩道

新茶摘む農家の嫁の襷掛け

湧き水に白玉さらす母の里

五月富士夕日に映えて遠かりき

○ 山浦紀子

車庫入れの庭面に香る躑躅かな

団子虫の甲羅の艶や柿若葉

菖蒲湯や母の声する無双窓

葉桜に風のそよぐや夫の忌来

湧水に大釜洗ふ竹落葉

○ 近藤真啓

手に慣らすマウスの鼓動夏の朝

学生の抱負眩しも風薫る

夏雲や駅前聴くサンポーニヤ

金糸梅雨さへ心地良き一日

ここよりは未踏の世界夕蛩

○ 中澤 弘

鐘の音の沈む山寺夏木立

芭蕉の句添へて石仏夏木立

婚の儀の花の夕映えクレマチス

朝刊を開くを夏の目覚めとす

炎天の道苦にならず水羊羹

春燈の句

安立 公彦選

夏来るメタセコイヤの頂に

卯月浪泊まつて行けと島の人

伽羅路や祖母の笑顔と涙顔

夏燕矢切の渡し掠め飛ぶ

絵こころを誘ふ卯月の海の青

鳴らし買ふ素焼の鈴や若葉風

ガラス皿黒文字を添へ葛桜

あくがるる明窓浄几緑さす

大都市の茂の陰の孔子像

孔子像の影を過るや青蜥蜴

山法師の無垢の白さを怖れけり

夜光虫漁業捨てたる老いの背に

釣人の横に菖蒲田せり出せり

潮騒と風の音のみや棕櫚の花

東京 池上 昌子

埼玉 大谷満智子

兵庫 向井 芳子

神奈川 辻 泰子

儒艮の死も弔うてをり沖繩忌

八百年の寺の階苔の花(鎌倉妙法寺)

満開の花仰ぎつつ抹茶汲む

大寺の庇にかかる老い桜

桜しべ降る丘の上の忠魂碑

せせらぎに載りて流るる花の屑

黒牛の鼻よく濡るる牧開き

瑞々しき山に抱かれ聖五月

鍬の柄に焼印押すや夏来る

沢水の音をたもとに踏取女

花筵一句を記す箸袋

雲雀野となりし斐伊川平野かな

一人静ゆふべの雨につぼみとく

子と住むや時には無口遠蛙

東京 遠藤 レイ

兵庫 秋山 葛

島根 土江 比露

